

## アメリカ薬剤師と日本薬剤師の違いを学んで感じた事

薬学部 5 年

アメリカ留学を終えて、教育や薬局、病院の違いを多く学ぶことができ、将来の自分はどうかより明確に考えられるようになった。教育に関しては特に日本との違いがあると感じた。アメリカの場合、臨床的な授業に重きを置いているということが分かった。アメリカでは、授業の中にガイドラインや商品名などが組み込まれており、患者情報から薬剤は何か適しているのかを考えて処方提案などができるようにしている。もちろん、日本と同じように基礎的な薬学の授業もしっかり組み込まれていた。日本では、基礎的な薬学は行なっているが、臨床的な薬学が欠けていると思う。そのような教育が欠けているため、フォーミュラリーやプロトコール、論文を読みエビデンスに基づいた処方提案などが出来ない薬剤師がある一定数出てきてしまうのだと思った。薬学 6 年制になったが、私はただ実習期間が伸びただけで何も変わっていないと思っている。歯学部や医学部と年数の肩を並べただけで、医学部のような臨床的な教育は取り入れられていない。そのため、私は臨床薬剤師を教育する制度を取り入れている病院で臨床的な教育の仕組みを勉強し、その教育方法を地方にも広める活動を将来しようと考えている。また、薬剤師外来や処方に関するプロトコールやフォーミュラリーは臨床的な薬学の知識を持つと考えられるようになってくると思うため、プロトコール、フォーミュラリーも病院で進めていき、研究でこのような利益が出たなどのような報告とかも出来れば良いと考えている。この考えは、アメリカ薬剤師教育を自分の目で実際に見て、考えられるようになったため、それだけでもアメリカ留学はとても意義のあるものだったと思った。今回参加してとても良かったと思った。ぜひ、後輩達も参加してほしい。

薬局では、逆にお薬手帳や薬歴、散剤、一包化がない事に驚いた。しかし、薬歴がなくても、成り立ってしまっている事が事実でもある。薬歴の必要性について再度検討すべきなのかもしれないと思った。アメリカの薬局だと、血糖などを測定したり、栄養指導をする部屋を設けていたり、監査は患者の近くで行い、ワーファリンのプロトコールなども行なっていた。またリフィル処方箋受付率が全米の薬局を平均して欲しい 50~70%も占めていることにも驚いた。これから日本の薬局にもリフィル処方箋が出来てくる可能性があるため、もし日本でも行うようになる場合は、アメリカの薬局のリフィル処方箋について再度勉強して参考にしていこうと思う。病院は精神科病院のみ見たため、実際のアメリカ薬剤師の業務の全てを見られた訳ではないため、詳しくは後輩達が学んできた内容を参考して勉強したいと思う。

これから日本は後期高齢者が人口の 1/4 ほどを占める時代に突入してくるため、医療費削減、医師の業務負担軽減は大事になってくる。薬剤費削減のためにフォーミュラリーを、医師の業務負担軽減のためにプロトコールを、首都では当たり前にある薬剤師外来を地方

でももっと普及させ、薬剤師外来の担当分野の拡大を、将来本を出したいと思っているため、博士号取得と研究や活動成果をだし本の出版を、日本薬学教育をもっと臨床的にするためにまずは自分自身が臨床的な教育を受けることを目標にして頑張っていきたいと思う。将来私は薬剤師としてお世話をし、お世話になっていくため、少しでも薬剤師、薬学 業界の力になれるように、自分の理想の人間像の YOSHIKI のようなカッコいい人間になれるように、そして何より高額な学費を出してもらっている家族に恩返しができるようにこれから頑張っていこうとこのアメリカ留学を通じてより一層思った。